栃内校長、壇上に倒る

第二代校長・栃内曽次郎は慶応二年（一八六六年）盛岡で生まれ、海軍兵学校を卒業、日清・日露戦争、第一次世界大戦で艦長や艦隊司令長官を務め、大正九年、岩手県出身者では斎藤実・山屋他人に続く三人目の海軍大将となった人物である。

義正翁と栃内が出会ったのは明治三七年春、函館でのこと。この年の二月には日露戦争が始まっていたが、海軍の中枢部にいて重要な地位を占めていた栃内が戦艦「武蔵」の艦長として函館に立ち寄ったとき、ちょうど義正も商用で滞在中だったのである。まだ四〇前で精悍そのものだった栃内に義正はすっかり惚れ込み、以来親交が続いたのだった。

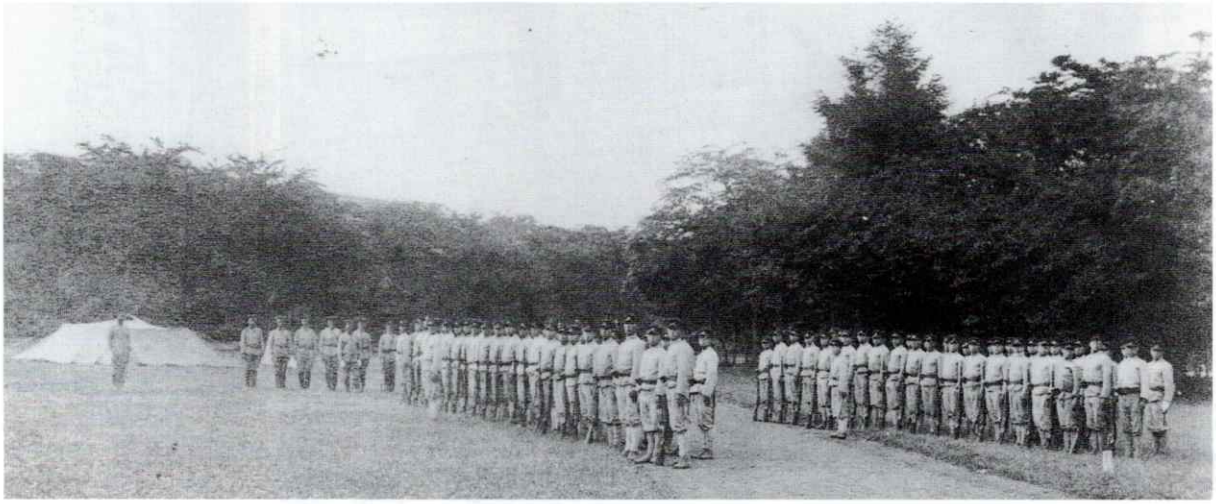
鈴木校長が辞任した昭和七年、栃内はすでに退役はしていたものの貴族院議員としてまだまだ多忙の身だったが、長年の友人・義正翁の懇請によって岩手中学校長への就任を快諾したのである。郷土の偉人の校長就任を生徒たちがどんなに誇らしく思い、期待したかは想像に難くない。

就任式は七月八日だった。栃内は東京から前日の午前一一時すぎの急行列車で盛岡に入り、その日は妙泉寺山で過ごしたが、いつもより愉快に語り、岩手中学の教育への大いなる決意を示したという。

就任式当日、満々たる自信をもって岩手中学の講堂に姿を現した栃内は、壇上で軍人らしい力強い調子で訓辞を始めた。

「ただいま三田理事長ならびに校長事務取扱三田（俊次郎）先生よりお話のありましたとおり、私は本日より本校の校長として就任することになりました。いままでとても創立以来本校の母体たる岩手奨学会の理事となってきたのですが、今度あらためて校長として本校を引き受けたのであります。理事としても、もちろん盛岡に居住してときどき職員ならびに生徒諸君ともお目にかかれれば良いのですが、事情それを許さないのでした。しかし理事長の懇望によってお引き受けしておったのであります。この度はなおさら職員生徒との接触が必要なのですが、東京に於ける種々なる仕事も手放すことができず、お断りしたかったのですが、理事長から再三推されましてとうとう承知したのであります。本校は創立以来すでに七年、昨年は創立五周年記念式典も催され、そのときは私も出席して諸君にお目にかかり一場のお話を申したのであった。そのときの話を覚えている生徒があるだろうか。

私は校長として生徒諸君に望むことを簡単に、ひとつお話したい。東北地方、ことに岩手県は教育ばかりでなくすべての文化において日本の全国平均に達していないということである。それはすなわち岩手県の人々は努力勉強が足りない、時間を空費して遊んでいるからである。私は日



当時の年中行事　兵営生活（昭和8年）

本に生まれて日本に成長した。また二、三度、西洋諸国にも行って見た。そしていつでも日本人は西洋人に比べて勉強が足りない、時間を無駄にするということを感じた。日本人のうちでも岩手県人はもっとも不勉強で時間を空費していると思う。このことは、かつて当地の新聞に新年の所感として問われたときにも話したことがあった。諸君は子供のときからそういう環境のもとにそういう家庭で成長してきたのであるから、べつに何とも感じないであろう。しかしこのことは、いちばん大事な心すべきことであるからして、諸君は新たなる日本帝国を背負って立つのは我々であるとの自覚のもとに大いに努力勉強に努めなければならない」

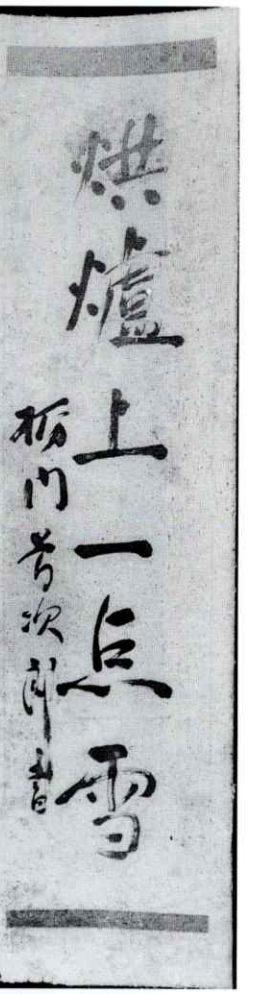
長い訓辞だった。途中、気分が悪くなったのか、栃内校長の上体が横に傾いた。異変に気づいて駆け寄った島軒十次郎教師を手で制し、校長は演壇にもたれたまま話を続けた。生徒たちは不安な気持ちで聞いていた。

「そして国家有用なる国民の一人として、自分のためにも国家のためにも名を成すべきである。かく国家有為の人材を養成することがすなわち三田理事長の本校創立のご精神であり、また教育の本旨なのである。また私は常に学校にいて諸君と話すことはできないのであるが、私の魂はいつでも本校にいるのである。であるから私のいないときは私の意を体して教頭以下先生方の教えに従って一意勉学に努められたいと思います。なお現今の教育はあまり機械的になっているが、私は常にその点に飽き足らず思っていたのである。その他まだ話したいことはいくらもあるのですが、それらの話はその折に譲って今日はこれで結びます。今日は非常に昂奮しているのでこれ以上話はできませんから、諸君はよく私の話を記憶しておいて下さい。級長はノートによく書きとめておいて下さい」

ここまで言ったとき、栃内校長は倒れた。それまで水を打ったように静かだった講堂は、騒然となった。すぐに岩手医専附属病院（現岩手医大附属病院）に運ばれたが、脳溢血で、すでに手遅れの状態だった。七月一二日午前一時三五分、栃内校長は眠るような大往生を遂げた。享年六七歳。

「原さん以来の偉人を失うことは、惜しみても惜しみきれません」

簡潔なこの言葉のなかに、義正翁の思いのすべてがこめられていた。また栃内が郷土にとってどれほど大切な人材だったかは、岩手日報が



昭和７年揮毫の
栃内校長の書

昭和７年７月12日
妙泉寺山別荘にて
営まれた栃内曽次
郎校長の通夜

その死を報じる号外を出したことからもうかがわれる。

通夜には数人の生徒代表が参上したが、そのなかの一人は、政財界の巨頭たちが綺羅星のごとく並んでいたのが印象的だったと後に述懐している。妙泉寺山から東顕寺へと向かった七月一五日の葬列は、長い長い列だった。葬列に参加した岩中生たちは、栃内校長のたくさんの勲章をそれぞれ一つずつ捧げ持って歩いた。

ところで、盛岡では空前の盛儀だった葬儀の様子をフィルムに収めた人がいた。少年期からカメラや映写機を愛用して、昭和初期の貴重な映像フィルムの所蔵家として知られる池野藤兵衛氏である。当時まだ二〇代で、市内の老舗・木津屋本店に勤務していた池野氏は、郷土の偉人の葬儀の模様を九・五ミリのフィルムで本町通りの田口写真機店の二階から撮影したのだった。当時の葬儀の行列風景や市内の様子がよくわかる興味深い内容の映像フィルムはその後ビデオに再生され、平成五年一〇月、池野氏のご厚意によって母校に寄贈されている。